

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 9 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370859

研究課題名(和文)古代ギリシア・ローマ世界における呪詛板の研究

研究課題名(英文)A Study of Curse Tablets in Ancient Greco- Roman World

研究代表者

前野 弘志 (Maeno, Hiroshi)

広島大学・文学研究科・教授

研究者番号：90253038

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：第一に、2010年にレバノン南部の都市ティール郊外の地下墓で発見された呪詛板の解読と研究成果を、レバノン文化省考古総局が発行する学術雑誌に掲載した(現在印刷中)。第二に、呪詛を含む魔術がなぜ「効く」と考えられたのか、その理論を、ギリシア語魔術パピルス史料として、実証的に明らかにした。第三は、ローマにおける戦車競技の持つ豊穡呪術的機能とローマ国家の起源との関係を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Firstly, I studied and edited the curse tablet which was discovered in a hypogeum in the suburb of Lebanese southern city Tyre in 2010 and my paper will be published in a Lebanese academic periodical issued by the Lebanese Ministry of Culture, Directorate General of Antiquities (now in printing). Secondly, I made clear the "theories" why magic was thought to be effective based on Greek Magical Papyri. Thirdly, I clarified the relationship between the fertility magic function of chariot racing in Rome and the origine of the Roman state.

研究分野：西洋古代史，碑文学

キーワード：呪詛板 魔術 古代地中海世界史 碑文学

### 1. 研究開始当初の背景

泉拓良京都大学教授を団長とする日本の考古学調査団が2010年、レバノン南部の都市ティール郊外の地下墓から1枚の呪詛板を発見した。私は、その呪詛板の解読と調査を泉教授から依頼された。それまで私は専ら記念碑的な碑文を研究してきたが、その依頼をきっかけとして、本格的に呪詛板研究を行うこととなった。呪詛板研究は、欧米においては19世紀末から本格的に行われ、現在でも盛んであるが、日本においては敬遠されてきた分野であった。日本人研究者による呪詛板の発見、及びその翻訳と研究は、これまでなく、本研究が最初のものである。

### 2. 研究の目的

本研究の意義は5つある。第1に呪詛は人類に普遍的な行為である。第2に呪詛板から日々の生活の中で引き起こされた古代の人々の激しい感情を直接読むことが出来る。第3に呪詛板に「声なき人々」の声を聞くことが出来る。歴史者や記念碑が語るのはエリートの歴史であるが、呪詛を書いた人々の大多数は、名も無き民衆・女性・奴隷であり、呪詛板の研究を通して「下からの歴史」を構築することが出来る。第4に呪詛板は宗教の教義ではなく、民衆レベルにおける実践を知る絶好の素材である。第5に各地の呪詛板文書から各地の方言を知ることが出来る。本研究の目的は、これら5つの意義を追求することにある。

### 3. 研究の方法

第1に出来るだけ多くの呪詛板に関する史料を収集する。これはすでに資料集・研究書・雑誌などで報告されたものである。これらを丹念に読み、古代地中海世界における呪詛文化の全体像を把握する。第2に上記2010年にティールで発見された呪詛板を解読・調査・出版する。第3に呪詛板は魔術の残滓であるので、そこから呪詛の理論は分からない。そこで古代の魔術のマニュアル本であった『ギリシア語魔術パピルス』を分析して、魔術の「理論」を明らかにする。第4に特に呪文に着目し、古代地中海世界におけるヒトと情報の移動を分析する。第5に呪詛板の実物と発見場所を実見する。

### 4. 研究成果

2010年にティールで発見された呪詛板の研究は、レバノンの学術雑誌BAALに投稿し、vol.17(2017)に掲載されることとなった(印刷中)。この呪詛板テキストは、大きく分けて3部構成になっている。また呪詛文は、内容的にさらに4段落になっている。

1. 呪文：神々の呼び出し
2. 印：神々の出現
3. 祈願文：神々への依頼
  - 1) 3人の裁判官たちに対する願い

- 2) 16人の牛追いたちの名簿
- 3) 16人の牛追いたちに対する呪い
- 4) 締め言葉(イエス・キリスト)

この呪詛板はキリスト教的グノーシスの特徴を備えており、遺跡の出土状況から2世紀後半以降のものと考えられる。この小さな鉛板から、当時のティール郊外の農場における小さな日常的な人間関係が分かるのと同時に、メソポタミア、エジプト、ギリシア、ローマに至る古代地中海世界における大きな宗教思想の混淆が見られる。また、呪詛者はキリスト教徒であったが、様々な神々の名前を唱えて祈願しており、この呪詛板から初期キリスト教徒の教義ではなく、庶民レベルでの宗教実践をまざまざと知ることが出来る。

『ギリシア語魔術パピルス』を分析して、その概要と魔術の「理論」を明らかにした。『ギリシア語魔術パピルス』とは、エジプトで発見された、主に3から5世紀に書かれた魔術のマニュアル本である。そこには様々な魔術を行うのに必要なモノや方法が記されているのみならず、なぜ魔術が「効く」と考えられたのか、その「理論」が述べられている。それによると、魔術の力の根源は「名前」と「印」にあることが分かった。「名前」とは、神々の名前のことであり、通常人間が知っている神々の呼び名ではなく、魔術師しか知り得ない、神々の隠された本当の名前のことである。これを人間が知り唱えようと、唱えられた神々はその人間の言うことを聞かざるを得ないと言う掟があったと信じられていた。そして通常、様々な地方の様々な神々の名前が数珠繋ぎにされて唱えられるので、それは「呪文」と同義とされる。「印」とは、文字のように見えて文字ではない、アルファベットのように音だけを持つのではなく、漢字のように意味を持つ記号のようなものである。それは神々の名前に対応する印(しるし)ないしは印(いん)であり、それが書かれた物や場所には、その神々の力が宿ると考えられた。したがって、呪詛板や呪詛による攻撃から防御するための護符には、「名前」と「印」が書かれたのである。また、魔術を欲望の裏返しとして捉え、魔術の目的を分類すると、最も多かったのは健康に関するもの23.5%、二番目は性欲に関するもの21.5%、第三は未来などの予知21.2%、第四は復讐8.8%、第五は人々に認められること、称賛とか商売繁盛など7%、であった。

戦車競技の豊穰呪術的機能とローマ国家の起源に関する関係性を突き止めた。戦車競技(戦車競争)は、剣闘士競技と並んで、古代ローマ人が最も好んだ見世物の一つである。伝説によれば、ローマにおける戦車競技を最初に始めたのはロムルスである。その目的は、彼が新都市を築き、各地からならず者をかき集めて男性市民を調達した後に、彼ら

の妻となる女性を獲得するために、若い女性をローマにおびき寄せるための口実として祭りを開催し、祭りのメインイベントとして戦車競技を開催したと伝えられている。この祭りはコンスアリア祭と呼ばれ、コンススという神を祀るのであるが、比較宗教学的な分析を行うと、コンススが大地の植物やあらゆる生命を活性化させる「大地の精」のような存在であることが分かってきた。大地を女性の身体に例える宗教感、世界中に普遍的に見られ、大地に女性器があるとする観念も至る所で確認される。ロムルスが初めて戦車競技を開き、後の大戦車競技場が建設されることになった場所は、パラティヌス丘とアウェンティヌス丘の間にある低湿地帯であった。そこにおいて穀物の播種期と収穫期の年二回、コンスアリア祭が行われた。このことは、その沼地の窪みにあったとされるコンススの社こそ「大地の女陰」(ウァギナ・テラエ)であり、コンススはそこから出て大地を満たして豊穡をもたらした、その後そこに戻ってくる「大地の精」であり、そこで行われた戦車競技は本来、大地に振動を与えて大地の精を活性化させるために行われた豊穡儀礼の一部であったのではないかと推測される。そして、農民たる男性市民を強制的に都市に居住させ、このような豊穡呪術的な農耕儀礼を挙げて彼らをつなぎとめたこと、これがローマ国家の起源であるという仮説を唱えるに至った。王世紀ローマに関する研究は、文献史料及び考古学的資料、双方の少なさから、手詰まりの感があった。近年は構築主義的な手法が主流となり、結局のところ王政期の実態がわからないままであったが、このように比較宗教学的アプローチを行うことによって、新しい視覚が提示出来たと評価されたい。

分析ソフトRを使った呪文分析に向けての準備を行なった。分析ソフトRは、テキストの曖昧さを分析して、一連の類似したテキストが、いつどこでどのように変容したのかを、系統樹的に表示する機能を持っている。そこで報告者は、このソフトで呪詛板の呪文を分析すれば、ある呪文がどこで発生し、どこに伝播し、どのように変容したのか、そのプロセスを明らかにすることが出来るのではないかと考えた。またこのことは、ひいては古代地中海世界における、人と情報の大きな流れの、一つのモデルを描くことに繋がるのではないかと考えた。その手始めとしてセト呪詛板を扱った。これは、ローマ郊外にある一つの納骨堂に納められていた複数の骨壺の中から、1850年に発見された48枚の呪詛板で、4から5世紀のものと考えられ、年代と発見地が特定できる、まとまった資料であるので、一つの標準資料になるだろう。今後はこれまでに収集した他地域の史料と比較していく。これは、情報文化の専門家との共同作業となり(すでにある情報文化の専門家と打ち合わせをした)、大きなプロジェクトになりうる

し、波及効果も期待できる。

2010年にレバノン南部の都市ティール郊外の地下墓で発見された呪詛板を解読したが、呪詛板は魔術の道具であり、言わば魔術の残滓であるので、そこから魔術の全体は分からない。そこで魔術のマニュアル本である、魔術パピルスの分析に進んだ。魔術パピルスには、魔術の理論、目的ごとに必要な道具、方法、呪文などが記されており、豊富な情報が得られる一方、一つのテキストの中に、矛盾した記述が見られることが珍しくない。このことはおそらく、この種の文書を書いた人物が、様々な魔術書を参照し、そこから得られた情報を引用して自由に編集した痕跡、すなわち、様々な情報がブレンドされたことの証であると言えるだろう。そしてこれこそが、2世紀以降の呪詛板に顕著に見られるようになる、シンクレティズムを生み出した原動力であったと考えられる。では、魔術情報のブレンドとは、どのような人たちだったのだろうか。魔術師と呼ばれうる人々のカタログを作成し、その中で、魔術書を記述した人物が、どのようなタイプの魔術師であったのかが、明らかになりつつある。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2件)

Hiroshi Maeno, A New Curse Tablet from Tyre Discovered in 2010, *Bulltin d'Archéologie et d'Architecture Libanaises*, Ministère de la Culture Direction Générale des Antiquités, vol.17 (2017) 印刷中。査読あり

前野弘志「『ギリシア語魔術パピルス』を読む」『西洋史学報』(広島西洋史学研究会)42号、2015年3月31日、1-29頁。査読あり

[学会発表](計 3件)

前野弘志「コンスアリア祭-戦車競技の豊穡呪術的機能とローマ国家の起源-」平成28年度広島西洋史学研究会大会(倉敷市, 国民宿舎良寛荘)平成28年8月11日

前野弘志「レバノン南部の都市ティール郊外の壁画地下墓 T.01 とその碑文」第83回西洋史読書会(京都大学)平成27年11月3日

前野弘志「『ギリシア語魔術パピルス』を読む」中国四国歴史学地理学協会大会2014年度大会(広島大学)平成26年6月8日

[図書](計 0件)

なし

〔産業財産権〕

なし

出願状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

なし

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

前野 弘志 (MAENO, Hiroshi)

広島大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：90253038

### (2) 研究分担者

なし ( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

なし ( )

研究者番号：

### (4) 研究協力者

なし ( )